20231112　朝礼拝　マタイによる福音書４章１〜４節

「パンも好きだし、お米も食べます」

私が、まだ実家に住んでいた頃の話です。私の実家の朝食は、和洋折衷、その日の母の気分によって、色々な種類がありました。もちろん、前日の夕食の種類にも影響を受けるわけですが、バターを塗った食パンのこともあれば、ご飯と味噌汁のこともあり、昨晩のカレーのこともあれば、水炊き鍋の残りで作った煮込みうどんということもありました。だから、子ども心に「キミの朝ご飯は、パン派？　お米派？」という問い掛けに困ったことを憶えています。「いや、うちは朝ご飯に何でも食べるんだけどな」と。世の中には、パンと決めたら毎朝パンしか食べず、ご飯と決めたらご飯しか食べない家庭があるんだろうかと不思議に思いました。

同じような話で、「あなたは甘党？　辛党？」なんて問い掛けもありますが、正直、美味しかったら甘くても、辛くても好んで食べますよね、きっと。個人的には、甘いよりも辛い方が好きだし、辛い物好きの御多分に漏れず、確かにお酒も好きですが、先週、幼稚園でやった焼き芋を美味しく食べましたし、羽二重餅も美味しいと思います。だから、食の好みを、強いて二通りに限定しまうことって、あんまり意味がないような気がします。

「パンも好きだし、お米も食べます」でいいし、「甘いものに目がないけど、辛いものも好きです」でいいんじゃないかと。日本という国は、諸外国に比べて、非常に食文化が豊からしいですね。普通のご家庭で、和洋中韓すべての料理を食べられる国って、多分珍しいと思います。朝はパンとコーヒーで済ませ、昼はラーメンとキムチを食べ、夜はすき焼きと冷酒を頂くなんて国は、他にはないでしょうね、きっと。色々な料理が食べられる日本って良い国だと思います。

まぁ、何が言いたいのかと言いますと、信仰生活においても、神様の御言葉か、それ以外か、と

いう二者択一にしてしまうことって、あまり意味がないような気がしますよね、ってことです。だって、この世界は、どこに行ったって、何をしたって基本的に「この世はみな神の世界」だからです。何を食べても、辛くても、甘くても、それらは全部、神様からの賜物であることに変わりはありません。「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」と。今回の聖書箇所では教えられています。この聖書箇所を聴いて、「確かにそうだ、この世のパンではなくて、神様の御言葉を求めて生きよう」と考える信仰もあるでしょう。でも、まぁ、ちょっと屁理屈っぽくはありますが、「この世のパン」を与えてくださることに感謝する、収穫感謝日という日があったりもします。敦賀教会幼稚園では、明日、収穫感謝礼拝を守ります。今年は、コロナ禍で中止していた「お野菜の持ち寄り」ということを再開しました。明日は、子ども達が各ご家庭からそれぞれに野菜を持ってきて、ここに並べて、神様が下さった恵みに感謝する礼拝を守ります。現在、敦賀教会幼稚園の園児数は、62 名なので、お休みする子どもがいるとしても、少なくとも５０個を超える野菜がここに並ぶことになります。そんな善意と信仰に溢れた野菜を見て、「人はパンだけで生きるものではない」なんて、話をするのは、多分、御心ではないだろうし、人間的な感性からしても、ちょっと違うような気がします。

人には、「食べ物としてのパンも大切だし、神様の口から出る御言葉も大切である」という当たり前のことを、まずは忘れないでいたいと思います。食べ物であれ、御言葉であれ、神様の恵みには、とりあえず、全部感謝なのです。

その上で、私たちは知っていますよね、神様がどうやって、この世界をお創りなったかを。神様は、その御手をもって、世界を創造されたわけではなく、すべて、その御言葉によって創造されました。創世記１章３節「神は言われた「光あれ。」こうして光があった」と。神様は、そんな調子で、ただ言葉を発することによって、この世界を創造されたのだと言います。だから、「神の口か

ら出る一つ一つの言葉で生きる」というイエス様の仰ったことの意味は、非常に幅広い可能性を持っているということです。恵みの雨も、海を泳ぐ魚も、空を飛ぶ鳥も、獣も、家畜も、草や花や木も、すべて神様の御言葉による創造物であり、また、私たちを生かす大切な恵みであるわけです。決して、「聖書に書かれた御言葉だけ」という小さく、狭い理解ではないということです。「この世は全て神の世界」「この世は、すべて神様の御言葉で満たされている」。そんな大きくて深い意味が、今日の聖書箇所には込められています。

そして、イエス様に忍び寄った悪魔の誘惑と言うのは、全世界を覆う神様の御言葉、神様の恵みからイエス様を遠ざけようと言う目的を持っていたということです。神様の御言葉によって成立した、この世界の恵み豊かなもの全てから離れて、「こっち側に来ないか」と悪魔は言ったわけですね。「自分が望むものを、自分が望んだように実現できる世界に来ないか」と。確かに、悪魔の言う「こっち側に来ないか」という誘いは、非常に魅力的だったかと思います。お腹が空いている時、満たされない心を持て余している時、どんなに求めても手に入らないものを、なお求めている時。神様が与えて下さっている豊かな恵みよりも、自分自身が思い描く願いや欲望の実現の方が、ずっと価値があって、意味があると思えるものです。でも、それは、自分と言う限界を超えるものではありません。僅かであり、儚くもあり、矮小な存在に過ぎない自分が思い描いた未来と、この世界を造られたほどの力と権威に満ちた方が示される未来と、果たして、どちらが良いのか。今回の聖書箇所には、それくらいに大きな問い掛けが含まれています。「目の前の石をパンに変えて悪魔の側に行くか、それともより大きな恵みと幸せを期待して神様の側に留まるのか」。

もちろん、空腹過ぎて生きるか死ぬかという局面に置かれた場合。それくらいに切迫感を伴った危機的状況に置かれた時。神様の悠長な恵みと祝福を待っていられないこともあるかも知れません。「今すぐに、この願いと欲望が叶うなら、悪魔にだって魂を売ってやる」というような。・・・

そんな試みに遭いたくはないと心から願いますが、人生の一場面において、そんな極限の選択を迫られることもゼロではないでしょう。だから、私たちは「主の祈り」の中で、「我らを試みにあわせず、悪より救いいだしたまえ」と、未だに祈り続けています。その甲斐あってか、「切迫感を伴った危機的状況」に置かれることは、私たちにとって稀だと思います。そこは感謝すべきことですね。でも、でも、本当に、本当に、荒れ野で空腹のために餓死するか、干乾びるかというような、極限の危機的状況になった場合、私たちには何ができるのでしょうか。聖書を開いて御言葉に聞くのでしょうか。御言葉を思い出して慰められるでしょうか。神様の救いを信じて、自分が生きるか死ぬかという切実な願いを押し留めることができるのでしょうか。「人はパンだけで生きるものではない」とは言え、人には越えられない限界があります。肉体的にも、精神的にも、耐えられない一線があります。もう八方ふさがりで、どうしようもない時に、私たちは、「神の口からでる一つ一つ言葉」を、どう理解し、どんな姿勢で待ち続け、どんな態度で受け止めればいいのでしょうか。

ここからが、私たち信仰者の素敵なところだと思うのですが。かつて、神様から「全イスラエルの民をエジプトから救い出せ」と無茶振りされたモーセさんは、そんな責任重大かつストレスフルな試みに耐えられるわけないと、ごねてごねて、ごねまくって、そして、最後の最後に、こうなりました。「主はついに、モーセに向かって怒りを発して言われた。「あなたにはレビ人アロンという兄弟がいるではないか」と。これは、時代を超えて、最終的に行き着く、私たちの究極の恵みであり、救いであると思います。「人はパンだけで生きるものではない、周りを見てみなさい、あなたを助け、あなたの悲しみにも、喜びにも寄り添い、共感し、一緒に悩んで、考えてくれる兄弟姉妹がいるじゃないか」と。ここに集まった私たち一同も、今日来られなかった教会員も、家族も、友人も、先輩も後輩も、すべて神様の御言葉と御心によって執り成された、掛け替えのない仲間であり、恵みであります。苦難の時こそ、悲痛な時こそ、神様が与えてくださった親愛なる人たちを、

心に留めたいと思います。と言いますか、そういう時のために、私たちは教会に集っているのかも知れません。助け合い、称え合い、支え合う、御言葉が繋いだ仲間たちも、神様が示された尊い御業の一つなのです。

神様が御言葉によって備えてくださったすべてに感謝する、と言うのであれば、私たちは、まず隣り合う信仰の友人たちの存在を感謝したいと思います。「見よ、兄弟姉妹がともに座っている。なんという恵み、なんという喜び」。そんな詩編 133 編の聖句も思い起こしつつ、神様が与えて下さった、ありとあらゆる恵みを見つけて、数えて、新しい 1 週間も感謝を忘れず歩んで参りたいと願うものであります。お祈りを致します。

神様。

今日も私たちを恵みの礼拝に招いて下さり、感謝致します。あなたは、御言葉によって、この世界を形作り、命を創造され、私たちに人生と役割と、そして共に生きる友人や家族を与えて下さいました。あなたの御言葉によって生み出され、私たちに与えられた、すべての恵みを感謝致します。どうか、私たちが試みに遭いそうな時、遭ってしまった時、あなたから与えられた御言葉の一つ一つを見つけて、癒しと平安を得ることができますように。また、あなたによって与えられた親しい人々の優しさに触れて、心を励まし、喜びを得ることができますように。御守りお導きください。

この祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。